

漢字

一 1 当然の権利。

2 友達に挨拶をする。

3 無表情な人。

4 動物の習性。

5 人から支えてもらう。

6 他者の反応を見る。

7 適切に処置する。

8 否定的に見られる。

9 肯定的に考える。

10 認知症は社会問題だ。

11 待遇を改善する。

12 立派に成長する。

13 余計な物は捨てる。

14 身近な話題。

15 経験を積み重ねる。

16 周囲の大人。

17 人から示された態度。

二

1 たしかに正論「せいろん」だ。

2 人の目に映「うつ」る姿。

3 大きな関心事「かんしんじ」。

4 笑顔「えがお」で迎える。

5 嫌「きら」われたくない。

6 始終「しじゅう」気にする。

7 自分の人柄「ひとがら」を知る。

8 屈辱「くつじょく」を受ける。

9 力が湧「わ」いてくる。

10 辛口「からくち」の批評。

11 性格が異「こと」なる他者。

12 お節介「せっかい」をやく。

- 13 それも一理「いちり」ある。
14 慎重「しんちょう」な態度をとる。
15 粘「ねば」り強い性格だ。
16 前向きな思考「しこう」をする。
17 細「こま」かいことにこだわる。

語句

- 一 腹を割って「何も包み隠さず本心を打ち明けて。」
2 辛口「評価などが手厳しいこと。」
3 せ者「表面とは違っていて得体の知れないもの。」
4 一理「一つの道理。一応の理由。」

二 1 人は困ったときは**ともすると**人に頼ろうとするものだ。

2 彼女はよく**お節介**をやく人だ。

3 残念な結果に終わった原因を**突き詰めて**考えてみる必要がある。

要点の整理

第一段落 初め〜二六〇・5

私たちは、ア「日常」のあらゆる場面で、相手からどう思われているかを気にするイ「習性」を身につけている。それは、人の目がウ「自分の姿」を映し出すエ「鏡」だからである。

第二段落 二六〇・6〜二六二・6

私たちは、他者の目という鏡によつて、自分の人柄や能力といったオ「内面的」な特徴を知ることができ、他者の目に自分がどう映っているかを知ること、誇りや屈辱のようなカ「感情」が生じる。そして、自分の評価された点やダメな点にキ「認知的」に反応できる人は、たとえ否定的評価を受けていることがわかって、今後のク「改善」に生かすことができる。その意味では、ケ「辛口」の他者、価値観や性格のコ「異なる」他者とのつき合いも大切だ。そういう他者との出会いが、自分のサ「成長」のきっかけになることもある。

第三段落 二六二・7〜終わり

自己とは他者であるという言葉には、自分のことは自分がよくわかっているつもりでも、結局はよくつかめず、自分をシ「遠い」存在に感じるという意味がある。だが、もう一つの意

味として、自己イメージは、いろんな他者がこちらに抱く^ス「イメージ」や言われた言葉、示された態度をもとに作られており、もともとセ「他者」がこちらに對して抱いたイメージであるという意味がある。そういった意味で、自己は他者であるということになるわけだ。

●要旨

人の目を気にするのは、人の目がア「自分の姿」を映し出す鏡だからだ。私たちはこの鏡によって、自分の人柄や能力といったイ「内面的」特徴や、自分がどのように評価されているかを知ることができる。この評価にウ「認知」的に反応できる人は、否定的な評価を受けても今後の改善につながる。自己は他者であるという言葉には、自分自身が遠い存在でよくわからないという意味と、自己イメージはもともとエ「他者」が抱いていたイメージだという意味がある。

内容の理解【正解】

一 周りの人の目に自分がどう映っているか。(十九字)

二 イ

三 日常のあらゝにする習性

四 他者の反応ゝができる。

五 エ

六 ・いちばん身くもしれない

・僕たちが自ゝージなのだ

七 ①自分自身

②人から言われた言葉

③人から示された態度

〈②と③は順不同〉

【読解のポイント】

一 本文冒頭から6行目までに「それ」「そんな」という指示語が多用されており、それぞれ直前の内容をさしている。設問となっている6行目の「それ」については、直後に「とくに友達からどう見られているかは最大の関心事と言ってよいだろう。」とある点をふまえて答えることがポイントである。「友達からどう見られているか」が「最大の関心事」であるなら、「周りの人の目に自分がどう映っているか」は「大きな関心事」なのである。

二 第一段落冒頭から、「人の目」が気になることについて、身近な例を用いて述べられており、その理由は「自分の姿を映し出してくれる鏡だからだ」と説明されている。さらに「人

の目は、言ってみれば、モニターカメラのようなもの。」(二五九・10)ともある。「モニターカメラ」とは、機械などが正常な状態に保たれるように監視するカメラのこと。この直後で「自分の姿が客観的にどのように見えるのか。それを教えてくれるのが人の目だ。」と述べられているので、正解はイ。

三 周りの人の反応が「気になってしかたがない」のは、私たちには「相手からどう思われているかを気にする習性」(二五九・4)があるからである。「習性」とは、「習慣によってつくられた性質。くせ。」の意。

四 二六〇ページの8行目から始まる「自分の顔を直接自分で見ることはできない。鏡に映すことで初めて見ることができる。」に注目する。これはつまり、「鏡に自分の顔を映すことで、初めて自分がどんな顔をしているかを知ることができる。」ということである。その後に「それと同じで」とあるので、これ以降で「鏡映自己」について説明されていると予測できる。設問に「具体的な内容」とあるので、「他者の反応によって、……知ることができる。」が答えであることは明らかである。

五 直後の文が、「ここで言う認知的反応とは」と始まっているので、この部分を参考に選択肢を判定していくこと。「認知的反応」とは、頭で反応することや論理的に反応することをさすがあるので、エ「自身を改善できる」が正解。イ「無反応」や、ウ「気持ちが悪く込む」は適当ではない。アには他人からの評価への反応のしかたについて触れられていないので、不適。

六 「自己とは他者である」という言葉の二つの意味を述べた後にある、「そのような意味で、自己とは他者である」と言うのではないか」(二六三・6)、「そのような意味で、自己は他者である」ということになるわけだ」(二六五・10)に着目できれば容易である。筆者はここで、二つの意味を紹介しているが、読者にとくに伝えたい意味は後者である。

七 「僕たちの自己イメージは、いろいろな他者がこちらに抱くイメージによって作られていることがわかる」(二六五・6)、「僕たちが自分に対して持つイメージは、もともとは他者がこちらに対して抱いていたイメージなのだ」(二六五・9)と繰り返されている。具体的には「人から言われた言葉」「人から示された態度」(二六五・7)をもとに自己イメージは作られていて、自分自身で作ったものではないから、「自己は他者である」と言えるのだ、というのが筆者の主張である。自己が、他者の目を鏡として映し出されたものであるのと同じ理屈である。